

胸高鳴る農の道

魅力と可能性に引かれ、農業の道を選んだ新規就農者たち。新しい発想と行動力で進む姿に地域からの期待は高く、将来の担い手として、

注目を集める存在だ。今回は、東海地方で奮闘する4人の新規就農者取材。今年の目標から将来の展望、経営への思いなどを紹介する。

内山 智さん

静岡県焼津市



イチゴの管理作業に取り組む内山さん

【静岡支局】「今年はブドウ栽培のための準備を整え、安定した農業経営を目指したい」と話すのは、藤枝市でイチゴ26畝を栽培する、焼津市在住の内山智さん(48)。8人の従業員と共に、海外支援事業で渡米し参加し

にイチゴ「きらび香」を高設栽培している。

新潟県に生まれ育ち、大学進学をきっかけに静岡県に移住。大学院卒業後は一般企業に勤務したほか、海外支援事業で渡米し参加し

万全な危機管理で安定経営へ

たリンゴ栽培などを経て、2021年3月に新規就農した。現在、イチゴの3作目だ。

内山さんは「イチゴの栽培は技術力が必要といわれるが、難しいほどやる気が出る」と話す。倉庫の改装、灌水や施肥のためのシステム設定などを自ら行うことで、コストを抑制。トラブル時には柔軟で迅速な対応が可能となっている。需要期の年末に、消費者が求める高品質の果実を出荷できるよう、23年8月には育苗用の夜冷庫を自分の手で全て建設した。

現在、3年後のブドウの収穫を目標に、ハウス内の整備を進めている。ブドウの管理のため、イチゴ栽培で働くパート従業員を年間雇用することで、経営と従業員の収入の双方が安定することを目指す。

内山さんは「ちょっとしたミスが重大なリスクになることもある。新規就農者で慣れていないからこそ、危機管理を万全にし、将来的に安定した農業経営を続けていきたい」と展望する。

(向井)